

信条の原点

石田博樹（長岡工業高等専門学校）

社会科教育の今

「君が代」が小渕内閣により突然に制定され、全国の公立の小中学校、高校で斉唱するべく強制されるようになって6年が経つ。広島県の県立高校の校長が卒業式における君が代斉唱問題に悩んで自殺したことをきっかけに、満を持していた政府与党内右派と文部科学省による法制化が性急に強行された。国民の間に多くの批判意見があったにも拘わらず、国会での十分な審議が全くなかったことは周知の通りである。

文部科学省は、「君が代の斉唱」を「強制ではない」と強弁しつつも、実質は、各県の教育委員会を通して公立学校における「君が代斉唱」の強制を要求し、斉唱の実施状況の点検とその報告を要求している。

入学式や卒業式の季節になると、各県の教育委員会から「君が代斉唱」の職務命令が出され、その斉唱の実施状況の報告が学校長に求められている。毎年の春、教育現場における管理職と教職員との軋轢がこうして繰り返され、教育委員会も学校長も、ジレンマの渦中に陥る。

日本の軍国主義とそれによる戦争の惨禍と愚劣さへの痛恨の反省によって立つ戦後日本の歴史教育を「自虐史観」であるとする立場のグループにより作成された「歴史の教科書」が、中等学校の社会科の現場教師を含めた日本の教育界からのみならず、アジア周辺諸国からも厳しい批判が出ているにもかかわらず、最近では、一部の教育委員会により、中等社会科教育の教科書として採択され始めた。

強制する側の姿

最近、各県の教育委員会において、「君が代斉唱」に協力しなかった教職員に対する、懲罰制度の導入の動きが目立ってきた。

だが、「卒業式や入学式で君が代を歌わなかった先生を処分する」という、東京都を始めと

する各県の教育長や教育委員長は、みな筆者と同じ50代後半の団塊の世代のはずである。「君が代」の法制化を急いだ当時の政府に素早く追随した当時の文部科学省の幹部職員として、その同じ団塊の世代であろう。

戦後に生まれ、「民主教育」の洗礼を受け、脱脂粉乳の粉ミルクを飲まされ、始まったばかりの学校給食なるものを味わい、受験戦争をくぐり抜けてきた世代である。

昭和40年代の前半には、大学紛争に遭遇し、安保、沖縄問題で啓発され、たまにはデモにも参加し、天下国家を論じ、人間の生き方を論じ、酒を飲んで仲間と口論して青春を送った者が彼等の中にも多いはずだ。

まともな大学生活を送った者であれば、彼等も、安保条約の屈辱さ、沖縄の人たちの無念さ、ベトナム戦争の理不尽さ、などに悲憤慷慨していた世代のはずである(特殊な者達以外は)。

それが、就職して20年、30年も経つと、世俗の波の中で、処世術を身に付け、面従腹背の世渡り術で首尾よく昇進を果たし、40、50代にもなると、いつしか、お上に追従した公式発言を繰り返している自分の姿を是認しているのだ。だが、どんな行状にも、臨機応変に、それなりの理由はつく。

彼等に求められるもの

しかし、彼等の姿を単に「変節」として処断することは正しくないであろう。子供の学資や住宅ローンを抱え、家族を抱えた男達の、それも一つの普通の姿かもしれない。普通の男にとっては、それも職場組織の中での自己の保身と昇進を図るための、やむを得ぬ選択かもしれない。実際、彼等とて大半は、自宅に帰れば普通の良き父であり、良きお爺ちゃんなのだろう。町内会の役員もいよう。PTAの役員もいよう。

学校長、教育委員会、教育長そして文部科学省の幹部職員であれ、「君が代強制」の不

合理さなんぞ、誰よりも本人自身が重々承知しているはずだ。さらに、自己の良心、信条と「職務上の立場」との乖離を百も承知のはずだ。正面からそれを指摘されれば反論はすれども、内心では青春時代から今日の定年時代に至るまでの我が身の姿の意外な変貌を十分に承知していることだろう。

彼等も普通の人間であれば、誰もが良心と職務との葛藤を内心に抱えているに違いない。そう考えると、やはり、家族を持ちつつ職場組織の中で生きるしかない普通の男達の宿命を感じてしまう。良心と職務は、すれ違うことの方が多いのかもしれない。

「君が代」の斉唱が強制すべきものではないことぐらいは、思想信条の自由を明言する日本国憲法の下で生きる人間であれば、学校長、教育委員会、教育長、文部科学省の幹部職員であれ、誰にも分からないはずはあるまい。

彼等に求められているのは、政治家からの理不尽な要求を無視し拒否する「行政担当者としての勇気と強さ」であり、理不尽な政治動向を平常心で黙殺する「行政の専門官としてのプライド」なのである。それを信条といっても良からう。

信条の原点は

「君が代」が、日本の国民全体を主体とし、その繁栄を希求して謳う歌では決してなく、実質的には、明治以来の天皇の長寿を願い、皇国思想を賛美するだけの歌でしかないことは、多くの識者がしばしば指摘していることである。

それだけではない。君が代の斉唱を強制させる政治動向には、今までの幾度かの戦争において皇国史観を旨とする日本の軍国主義がアジアの諸国民に与えた甚大な被害に対する無言の開き直りと無反省の影が色濃く付きまとう。日本の軍国主義により、すさまじい暴虐と陵辱の被害を受けたアジア周辺の諸国から強い批判が出るのは当然だ。

職業柄、常日頃、アジアからの留学生と接することの多い筆者自身も、「君が代」なんぞを斉唱する気には到底なれない一人である。だが、そうは思わない人々もたくさんいよう。多様な考え方があってよい。要するに、歌いたい者が歌えばよい。

家族を抱えた団塊の世代の一人としての筆者がこのように言えるのは幸運なのかもしれない。しかし、少なくとも学問を職業とする一人としては、そして、多くの若い学生と日常的に接することを職業とする者の一人としては、自分の姿がいつも若い学生達に見られている、という意識が常に働く。学生達に惨めな後ろ姿を見られたくない、という心理が常に働く。

卒業後20年、30年経った時の学生達の思い出の中で、笑われたくない、という心理が自分の根底にある。30年以上も前の自分の学生時代を、また当時の教師をも、誰もが良く思い出せるように、学生達も、今から20年、30年後でも私達を思い出せるだろう。実際、学生達は、常日頃、教官の姿を良く見ている。

戦争中は鬼畜米英として日本軍国主義を鼓舞し、青少年を戦争に駆り立てていた者が、戦後には手のひらを返して進駐軍に賛同、協力し、さらには、日米協力による安保繁栄論を吹聴していた例が日本の政界、教育界、「知識人」、「文化人」に数え切れないほど出現したことは周知の通りである。その流れを汲む「日米協力論者」の多くが、今日では、「現憲法は占領軍による押し付け憲法である」として、「改憲」を声高に主張しているに至っては驚くほかない。加えて、中国や朝鮮を侵略し、暴虐の限りを尽くした日本軍のことなど全く忘れ、「あれはアジア解放の自衛戦争であった」と力説する一部の者達の姿には、怒りを乗り越えて惨めさすら見えてくる。

私達が生きる上での信条は、結局、どこに自分の「節操の妥協点」を持って来たか、という点に帰着されるように思う。そして、それは、結局は、当人が子供時代に学んだ(学ばされた)思想によるように思える。就職後の当人の行状は、「生活を取ったか、信条を取ったか」といった単純なことで決まってくるのではなく、「容認できないものは容認できない」という個々の当人の確固とした思想の原点によるように思える。それを形成する場が家庭であり、学校教育の現場であろう。教育の責務の重さを改めて思う。

(2005年8月)